

巻頭言

もしも 雨が降らなかつたら

吉村 真理子

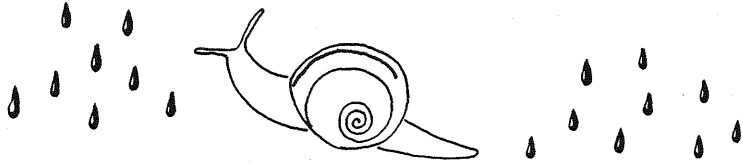
幼いころに見た絵本の中に、こんな子どもの詩がのっていたのを、今でも雨が降るたびに思い出します。

ゆうべのあめは

かしこいあめだ

よるふって あさやんだ

かしこいあめだ



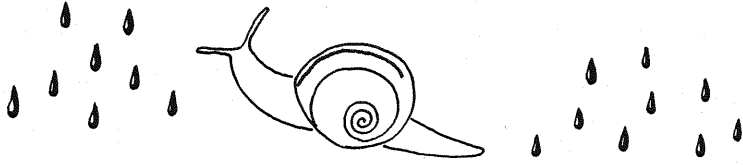
きつと、寝る前に雨の音を聞きながら「明日は晴れて遠足に行けますように」と願った子どもが、朝起きて濡れた葉っぱに当たる太陽の光を見て思わず口をついて出た言葉が詩になったのでしょうか。

梅雨の季節を迎え、何日も雨が降り続いていたら、保育者も晴れることを願わずにはいられません。晴れさえすれば子どもたちは園庭に飛びだしてエネルギーを発散させ、いろいろな遊びを見つけます。

六月の指導計画のねらいには「雨の日を楽しく過ごす」「雨の日ならではの楽しみを見つめる」などがあげられていますが、楽しみを見つけるとは発想を転換することだと思ふのです。私たちの予定は天候に大きく左右され「せっかくならあれをしようと思つていたのに雨で残念」ということが多い月ではないでしょうか。

そんなとき、保育者は別のプランを提供して子どもの気持ちの切り替えを図ります。傘をさして雨の中のお散歩。小さい子どもは長靴をはいて歩くだけでも大喜びです。傘の色に染まった空間は自分だけの別世界、傘に当たる雨の音を聞きながら心が弾みます。植え込みや石垣の陰で、カタツムリやカエルが見つつかればこんなうれしいことはありません。

雨が止めば、水たまりやぬかるみは子どもたちの天国です。濡れること、汚れることを気にせず思いつきり心も身体も解放して夢中になることから創造的な遊びが生まれます。

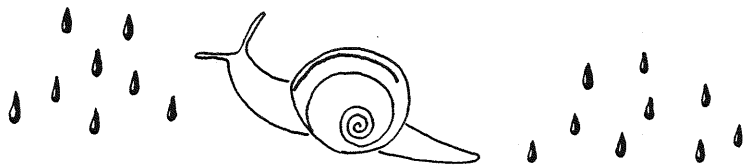


はじめはいやだったことでも、思い切ってその中へ飛び込んでしまうと、思いがけない楽しみやおもしろさを発見することがよくあります。

今年採用された新人保育者も、新しい職場に転勤された方も、この三か月、気持ちのいい晴れた日ばかりでなく、うっとりしく暗い日もあったことと思います。そんなとき、どうやってそれを乗り越えられたのか。子どもと同じように気持ち切り替えたからではなかったでしょうか。濡れたり汚れることを避けて通れば、その先の楽しさは味わえません。

口やかましい先輩が、実はとても親切に後輩のめんどろを見てくれる表現であったり、無愛想な同僚が、恥ずかしがりやのためものが言えなかったことに気がつく職場は急に親しみのこもった空間に様変わりします。相手が変わったのではなく自分の見方が変わったからです。ちょうど太陽が雲間から姿をあらわしたように風景が一変します。

また、保育の壁にぶつかって悩んでいるベテラン保育者も、壁と感じている問題を、自分の行く手を妨げるものとしてではなく、壁は外からの攻撃から自分を守ってくれるものとしてとらえたときに、悩みはむしろ拠り所となることを経験するでしょう。自分のクラスにいる特別に手のかかる子どもは、常に保育の原点である一対一のかかわりの大切さを思い出させてくれますし、性格の合わない複数担任仲間の存在は、多様な価値



観、多角的なもの見方に気づかせて、ひとりよがり陥ることを防いでくれます。壁は、保育者の成長に欠かせないものですが、必ずしも苦勞して乗り越えなくても、横手から迂回しても、はしごを使っても、穴をあけても向こう側に出ることができません。

ときには、いやだなと思う雨も、地球の生物にとってはなくてはならぬ恵みの雨です。私たちがどんなに雨のおかげで快適な生活が保障されているか言うまでもありません。目の前に置かれた「いやなこと」や「困った問題」は、発想を転換してとらえ直してみればいかがでしょう。

最後に、筆者がまだ中学生の頃、英語の時間に習ったクリスティーナ・ロゼッティの詩を（うる覚えなのですが）紹介したいと思います。

もし あめばかりで

ひのひかりが なかつたら

そらに にじは かからない

もし ひのひかりばかりで

あめが なかつたら

やつぱり にじは かからない

（元松山東雲短期大学）